

## 巻 頭 言

### 評価すること

石井志保子（東京工業大学大学院理工学研究科）

評価ということが最近良く言われる。特に「先生を評価せよ」と声高に言われている。新総理の安倍晋三氏が自民党の総裁選前の意見表明でも「学校の先生を評価したい」ということを言っていた。先生の評価は必要である、というのは全くその通りである。自分自身や子供の小中高等学校時代を思い出しても、あきらかにいい加減といわざるを得ない授業をする先生もおられたし。全霊を傾けて生徒たちを指導している先生もおられた。このような先生達を同列にしてほしくないものである。研究者においても、フィールズ賞やノーベル賞に値するような研究者と、論文を書くことをとっくの昔に「卒業」してしまっ、学問以外に生き甲斐を見い出している人と同列にはいけない。しかし、一所懸命努力をして、そこそこの結果を出しているAさんとBさんが、評価の仕方大きく差がついてしまうのは如何なものだろうか。あるいは常識的にはAさんの方が良くやっているとされるのにBさんの評価の方が高くなってしまったとしたら。．．ある大学での評価の話である。ここ数年の研究の外部資金獲得状況も評価の対象にしていたそうである。これはもっともであろう。このような場合、4年間継続の科研費を獲得した人が当然高い点数をもらうと思われるが、じつはこの人は最低点だったのである。評価の仕方は以下のようなものだった。科研費申請が採択されたら何点か加算（これは当然）、その他に、科研費を「申請したら」何点か加算、他の人の申請の研究分担者になっていると何点か加算、という風に不思議な加算点を合わせると、採択されたため4年間に1度しか申請していないその人は最下位になってしまったという。

先日のニューズウィーク誌が大学ランキング世界トップ100という特集を組んでいた。これも不思議な結果だった。1. 図書館の蔵書数、2. 外国人教員の割合、3. 外国人学生の割合、4. 教員1人あたりの学生数、5. ネイチャー、サイエンス誌に掲載された論文数、6. トムソンコーポレーション社のデータベースの人文科学版と社会科学版に収録された論文数、7. 論文引用数の多い研究者数、8. 教員1人あたりの論文引用回数 という計8つの指標を考慮して評価したという。ランキングの結果は上位100位の中にアメリカの大学が43校入っているのに対し、日本は5校、ドイツは3校、フランスはわずか2校、ロシアは0である。上記8つの指標のうち、アメリカの大学が圧倒的に強い項目は、外国人教員の割合と外国人学生の割合だけだと思われるのにこの差はいったいなんなのだろうか？（アメリカだけではなく）世界中の大学をちゃんと調べたのだろうかという不信感を持たざるを得ない。

またこの8つの指標が大学を測る適切なものであるのかも疑問である。すくなくとも数学の世界を計る指標にはなっていない。数学の論文は普通ネイチャーやサイエンス誌には掲載されないし、トムソンの人文科学版にも社会科学版にも当然収録されない。フィールズ賞級の論文でも引用数はせいぜい数百だから。何千という引用数のある分野の中にあってはほとんどの数学者は論文引用数の多い研究者数には数えられない。

実際この記事の結果は、筆者の研究領域の研究者を通じて抱いている世界の大学のイメージと全く異なっている。また過去のフィールズ賞受賞者の分布とも全く異なる。これまでにロシア出身の受賞者が7人いるのだが、彼らは「世界の100位にも入らないような大学」で学んだのだ。ちなみにアメリカ出身の受賞者は10人、フランス人は8人だ。

メディアが評価を流すとその功罪は大きい。ニューズウィークは世界で読まれている雑誌なので、このようなアメリカ賛美の記事が掲載されれば留学生は（数学志望の学生も含めて）さらにアメリカに集中することになるだろう。

奇妙な評価をあげつらうことはいくらでもできる。

評価をするのは大変である。間違った評価によって引き起こされる結果は評価をしないより悪くなることもある。だからといって「評価をするな」ということでは決してない。適切な評価がなされる場合には、何を評価の指標にするかによって、評価される側に何が求められているのかがはっきりするであろうし、評価される側の自覚が促され教育研究の質が向上する可能性は大いに期待される。

完全に正しい評価というものはそもそもないのかもしれないことを肝に銘じ、ベターな評価を求めて相当の時間とエネルギーを注がなくてはならない。明らかに間違った評価を下された時に研究者ははっきり異議を申し立てなければならぬ。適切な時に正しい声を上げるためには常日頃から自分の仕事や分野の特性を外の人にどうやって理解してもらおうか考えながら研究を続けていくべきだろう。

数学者は自分の結果を専門外の人に説明するのはとても苦手である。ちょっとでも不正確なことを言うと、とても気持ちが悪いのが数学者の性向であるので、話をわかりやすくするために比喩を使ったり、議論を大ざっぱにしたりすることができないのである。そこをぐっところえて、できるだけ多くの人に数学の価値を正当に評価してもらえよう努力するのが、応用ばかりが重視されがちな時代を生きる数学者の務めであろう。

筆者はたまたま最近専門外の人達に講演をする機会が増えたのだが、そこで数学や大学に対するより正しい認識を持ってもらうためにはなるべく易しい言葉で語りかけるよう努めようと思っている。数学の論文作成以外のこうした地道な努力も正当に「評価」してもらえようか。